

## 4 無顆粒球症（顆粒球減少症）と血液検査の重要性について

アボットジャパン株式会社  
診断薬・機器事業部  
藤井 沙季

無顆粒球症は、体内に入った細菌を貪食する重要な働きをする好中球（顆粒球）が著しく減少し、細菌に対する抵抗力が弱くなった状態のことである。無顆粒球症は好中球数が 0 個/ $\mu\text{L}$  だが、定義上は 500 個/ $\mu\text{L}$  以下の病態で、同義語として顆粒球減少症や好中球減少症も用いられる。

甲状腺機能亢進症の治療に用いる抗甲状腺薬、心筋梗塞など虚血性心疾患の治療の後に血栓発症の予防に投薬されるチクロピジン、炎症性腸疾患や関節リウマチの治療で投薬されるサラゾスルファピリジン、その他消化性潰瘍治療薬、解熱消炎鎮痛薬、抗不整脈薬などの医薬品の服用により発症することがある。無顆粒球症になると体内に入った細菌を貪食することができなくなるため、かぜのような症状として「突然の高熱」、「のどの痛み」などの感染に伴う症状がみられる。

無顆粒球症は、平成 19 年 6 月厚生労働省より重篤副作用疾患別対応マニュアルに医薬品の副作用として発症する血液疾患として記載されている。医薬品添付文書に無顆粒球症の副作用が記載されている医薬品においては、血液検査を確実に実施する必要があり、無顆粒球症を早期発見するために、2 週間に 1 回程度、血球分画を含む血液検査を実施することが望ましい。今回、好中球の経時的変動を症例として紹介します。